

新学術領域第4班研究会「ロシア帝国論・ソ連論」概要

日時：2012年9月20日（木）15時～18時30分

場所：九州大学西新プラザ多目的室

第1部：書評会

高田和夫著『ロシア帝国論：19世紀ロシアの国家・民族・歴史』（平凡社、2012年）

書評者：宇山智彦（北海道大学スラブ研究センター）

池田嘉郎（東京理科大学）

第2部：研究報告

立石洋子（北海道大学スラブ研究センター非常勤研究員）

「フルシチョフ期のソ連における自国史像の変化：シャミーリの反乱の評価を中心に」

第1部では、ロシア史のベテラン研究者である高田和夫の新刊『ロシア帝国論』を、著者ご自身も招いて合評した。

書評者のうち宇山は、本書が民族、植民、ロシア化、学知、ナショナリズム、そして風景画に至るまで、魅力的なテーマを多く盛り込んでいることを高く評価したうえで、さまざまな民族がロシア帝国の構造や認識論の中でどのような位置を占めているのか明確にされず、単に並列されているため、序論で批判されている「ロシア（人）対非ロシア（人）の単純な二項対比」を本書自体も克服できていないのではないかと指摘した。ロシア帝国のアジア認識・スラヴ認識（この場合のスラヴは主に帝国外のスラヴ人）についてそれぞれ興味深い事例が紹介されているが、アジア政策とスラヴ政策の対比・連関は明瞭になっていない。また、帝国権力と民族エリートや地方社会との相互作用のような、近年のロシア帝国論で考察が深められてきたポイントも十分に摂取されているとは言えない。しかし近年のロシア帝国論が理屈っぽい議論を好み、またロシア特殊論を解体していわば普通の国として他の帝国と比較しようとするのに対し、本書はロシア特殊論に陥ることを避けつつ（帝政期のロシア論が西欧近代の影響を深く受けていたことを見事に示している）、ロシアとは何かという問題へのよい意味でのこだわりを大事にしており、相補的な関係にあるとも言える。

池田は、本書が幅広い切り口を採用していることを優れた特徴として評価した。特に第2章「帝国空間の統治位相」における領域と境界の議論や、地域（地方）と国家（帝国）に対する「二重の忠誠」という仮説、第5章「ナロードナスチと学芸世界」における「科学と文化」の時代（科学の深化と国家化）の議論が充実しており、明治日本の同時代的状況への言及も興味深いと述べた。これらに関連し、権力が現地住民との接点を増やそうとする志向が随伴する民族的デモクラチズム、第一次世界大戦期の保養地ブームにおける帝国諸地域の景観への関心などについて池田自身の議論を展開した。他方で本書では帝政期の言説におけるロシア人概念の多義性への目配りが不十分であり、本質主義的な把握がなお見られること、

「ロシア」対「非ロシア」の二項対比が必ずしも克服できていないことを指摘し、帝国のコーカサス地域では民族意識の発展が遅れること、ロシア帝国全体とは別の（ロシア人地域としての）ロシアが想定されるようになったのはソヴィエト期になってからであることなどを述べた。

著者からは、本書執筆の動機・経緯に関する説明を含め、書評者への返答がなされた。フロアを交えての議論では、博学な著者が書いた読み物としての本書のおもしろさ、「ロシア的」「イギリス的」といった概念の扱い方などが話題になった。

第2部では、博士論文に基づく著書『国民統合と歴史学：スターリン期ソ連における「国民史」論争』（学術出版会）を昨年上梓した、立石洋子が報告した。19世紀北カフカスのシャミーリ（シャミール）反乱は、ソ連の諸民族を扱う歴史学において最大の政治的論点であった。1930年代半ばに、ロシア民族主義を危険視するそれまでの歴史観から、ロシア帝国による非ロシア諸民族統治を部分的に正当化する見方が変わってからも、シャミーリ反乱は非ロシア人の民族解放闘争のシンボルであり続けた。独ソ戦期に北カフカスを占領したドイツ軍がシャミーリ反乱をプロパガンダに利用した後、ソ連ではこの反乱および北カフカス諸民族に対する否定的な評価が広まり、1950年に、シャミーリが「オスマン帝国の援助を受け、『聖戦』の旗のもとに民衆をロシアに対して蜂起させた」という公式見解が提示される。スターリン死後、パンクラートヴァ、ブルジャーロフら著名な歴史家たちがロシアの植民地主義・民族主義を批判し、シャミーリ反乱に参加した大衆の闘争を評価したが、ロシアによる併合の肯定的評価と反乱の否定的評価自体は維持された。民族運動を肯定的に描写しつつも、民族内の階級対立を強調するのが、フルシチョフ時代に模索された歴史評価の「統一の基準」の特徴である。シャミーリ反乱を反動的とした1950年の決定が最終的に取り消されたのは、ペレストロイカ期の1988年のことであった。

フロアからは、シャミールの運動の時代による局面の違いや、全体としては単なる反乱というより国家建設運動である（ロシア語でも「運動」にあたる言葉が用いられる）ことが指摘された。また、1956年1月に『歴史の諸問題』誌が開き600人以上の歴史家・教師が出席したという「読者会議」の性格、議論に関わったモスクワの歴史家たちのバックグラウンド、カフカスの中でシャミールの運動に参加した民族の歴史家による評価とそうでない民族の歴史家による評価の違い、などについての質問が出され、充実した議論が行われた。

（文責：宇山智彦）